8月「Rückblick」
アントニア・シュルト

1.国際交流員としての5年間が今月で末終結するので少し振り返る機会としたいと思います。

まず当然のことから始めていきたいと思います。5年間が経ちました。小林市に着いたときは29歳でしたが、今は34歳です。知識、スキル、経験などが入ってくると同時に、命がちびちびと飛んでいくというのが人生の流れですが、若い頃、すなわち10代、20代の頃は年を取ることをとてもネガティブに思っていました。5年が経って、確かに時々、変な寝方をすると肩こりになったり、ウォームアップをせず運動したら、次の日年を感じたりするような気がしますが、案外、年を取ったことが気になりません。

2.言葉にしてみると、20代の頃は青春を宝物にしていたのに対して、今は経験や思い出を宝物にしています。振り返ってみるとこの5年間が今までの人生の中で一番経験に富んだ期間だったかもしれません。それは日本、または小林市のおかげに違いないです。ここでは場所のことではなく、出会った人のおかげだという意味です。おかげ様で、日本語が上達したり、山の美と魚料理のおいしさを知れたり、左運転もできるようになったり、相手の気持ちを大事にするようになったりと、切りのないリストですが、自己を形成するために貴重な5年間でした。ここまでかなり私の目線から語って来ましたが、国際交流員という役は最初から「ギブ・アンド・テーク」という概念に側していると思います。ここではこのために行ったインタビューの１フレーズや、せめてアンケートから引っ張ったコメントを入れれば良いところだと思いますが、もっとリアルな一例を利用して、私からの「ギブ」の存在を証明してみようと思います。

3.この5年間、シーズンによって週２・３回ほど小林市内の小学校に行って、ドイツのことについて紹介してきました。その際に、特に高学年生徒に前任者のメロン氏（フランスから）と間違われ、「メロン先生」と呼ばれたことが結構ありました。正直に言うと、毎度少し気になっていました。だって、私は私だからでしょう？！

年が経つにつれてその反応が自然に少なくなったが、5年目の時でも「メロン先生」と呼ばれたことがありました。気になる気持ちを乗り越えて、その意味を考えてみたら、前のCIRの印象がどれほど残っていたか、この仕事の形成的な力の証として捉えるようになりました。5年目で小林のどこに行っても、お祭り、お買い物、市のイベントなど、必ずどこからか「トニー先生」と名前が分からないけど見覚えのある顔の子供に呼ばれて、達成感を感じました。この仕事をして、そこまで大したことはしてないと感じますが、5年間の様々な場面でかかわった小林の市民との絆ができたことをとても大切に思います。

私の中では、お金や物より経験や絆に価値がある、というのが充実した人生の土台にあります。経験豊富、絆も豊富な状態で任期を終了します。

4.次の国際交流員が男性の方になるんですが、最初の頃「トニー先生」と呼ばれる可能性は０ではないと思います。

＾＾

今までコラムを読んでくださってありがとうございました。小林市、5年間ありがとうございました。

これからも国際化に力を入れて、引き続き小林市に役に立てるように頑張っていきたいと思います。

今後ともよろしくお願いいたします。